

ブリーフィング・メモ

米陸軍の作戦術と戦術

戦史研究センター戦史研究室

樋口 俊作

はじめに

米軍を初め、諸外国の軍隊には作戦術（operational art）が存在している。作戦術に関する一般的意義や必要性、発展の経緯などは先行研究¹により明らかにされている。戦争には、戦略次元、作戦次元、戦術次元という三つの戦争の次元（the levels of warfare）があり、戦略次元は政治の分野、作戦次元以下は軍事（用兵）の分野であるとされる。そして、作戦次元において戦略と戦術の調整を行うための方策が作戦術である。

他方、陸上自衛隊には戦争の次元、特に作戦次元や作戦術といった概念は公式には存在しておらず、用兵に関する方策といえば主として戦術である。

では、戦争の次元や作戦術という概念を取り入れている軍隊において、作戦術と戦術の関係や差異はどのようなのだろうか。本稿では米陸軍に焦点を当て、ドクトリン文書からその問いを考察する。

本稿により、作戦術と戦術のそれぞれ単体に対する研究に比べて、両者の特徴をより鮮明にできるであろう。また、本稿は、陸上自衛隊が米陸軍のように作戦術を有する組織と共同する際に、両組織の軍事的な考え方の違いを理解して円滑に行動するための一助になることも期待できる。

作戦術と戦術は戦争の次元との関係が強いため、本稿ではまず戦争の次元について概観したのち、作戦術と戦術を見ていく。なお、米陸軍ドクトリンにおいて作戦術が登場したのは1986年のことである。その後、現在までドクトリンの改訂は何度も行われており、これに合わせてドクトリン上の作戦術や戦術の定義や説明も変化してきている。本稿では紙幅上、現時点のドクトリンのみを参照して考察する。

1 戦争の次元

本章では米陸軍における戦争の次元に触れたのち、各次元においてどのような行為が行われているかについて述べる。

（1）戦争の次元

戦争の次元とは、国家目標、作戦的アプローチ（operational approach 後述）と戦術的タスク²（tactical tasks）の関係性を定義づけ、明確にするための枠組みであるとされている。米陸軍でも戦略次元、作戦次元、戦術次元の三つの次元が設定されている。戦争の次元という枠組みを設定する意義は、各級指揮官や司令部などが三つの幅広い役割、すなわち、戦略の立案、複数の戦闘同士の関係の調整、または戦

¹ 作戦術に関する国内の先行研究には、片岡徹也、齋藤大介、佐川詳二や北川敬三の研究などがある。片岡徹也「古典用兵思想から軍の革新へ（第5回）創造の方法論を求めて（戦争の作戦的次元、作戦的視点）」『鵬友』36巻6号（2011年3月）27-46頁。齋藤大介「戦争を見る第三の視点『作戦術』と『戦争の作戦次元』」『戦略研究』第12号（2013年1月）79-100頁。佐川詳二「作戦術（Operational Art）とは歴史の変遷から見るその本質」『鵬友』第39巻第4号（2013年11月）～第39巻5号（2014年1月）連載。北川敬三「安全保障研究としての『作戦術』その意義と必要性」『国際安全保障』第44巻第4号（2017年3月）93-109頁。また、最近では『海軍校戦略研究』第10巻2号（2020年12月）に作戦術やドクトリンに関する特集がある。

² “mission”と“task”はともに日本語の「任務」の意味があるが、本稿では“mission”を「任務」、「task」を「タスク」と訳している。米陸軍ドクトリン上の両者の関係は、「任務＝目的＋タスク」である。

術的タスクの実行のうち、どの役割を担っているかを明確化し、その役割に集中させ、責任関係を明らかにできることにある。

(2) 戦略次元 (strategic level)

戦略次元では目的 (ends)、方法 (ways)、手段 (means)、受容可能なリスク (risk) の範囲が定められる。戦略次元の目的とは、政策や国家戦略などから導き出される自国または多国家間レベルの目的や戦域レベルの目的のことである。戦略次元では、これらの目的を達成するために軍事力以外も含めた国家の諸力をどのように使用するかという方法と、そのために必要な能力や手段が定められる。

(3) 作戦次元 (operational level)

作戦次元では、戦役 (campaign) や主要な作戦を計画することにより、部隊の戦術的運用と国家目的や軍事戦略目的をつなげる行為が行われる。指揮官は与えられた目標を達成するために、主要な部隊をどのように、いつ、どこで、何のために使用するかを定める。こうして戦術次元の行為に対して、目的と使用できる資源が付与される。また、事前の計画ばかりではなく、戦術的な勝利を戦略次元の利点に波及させたり、戦術的な失敗を覆したりすることも行われる。作戦術はこの次元で特に重要である³。

(4) 戦術次元 (tactical level)

戦術次元では、戦術部隊 (tactical units) やタスクフォース (task forces) に与えられた軍事的目標を達成するため、戦術的行動、会戦、交戦⁴やそのほかの戦術的タスクが実行される。戦術が対象とするのはこの次元である。

2 作戦術と戦術の関係・差異

本章では、米陸軍における作戦術と戦術の定義、両者の関係や差異を項目ごとに比較し、考察を加える。先に比較の概要をまとめると、表1のとおりである。

(表1)

米陸軍の作戦術	区 分	米陸軍の戦術	
認知的な取り組み	定 義	部隊の運用、配置、活動	
<ul style="list-style-type: none"> いつ、どこで、何のために戦術行動を行うかを決定 戦術行動を有利な状態で行えるよう準備 	両者の関係	作戦術によって配列された戦術行動の 実行	
<ul style="list-style-type: none"> 技術、経験、知識、判断力、批判的思考、創造的思考など 作戦の学 	必要な能力	戦術 の術	<ul style="list-style-type: none"> 任務遂行手段の創造的、柔軟的な使用 不確実な状況での意思決定 戦闘の影響の理解
		戦術 の学	戦術の計測可能、文書で表現可能な側面の理解
PMESII - PT、METT - TC	問題把握	METT - TC	

³ 作戦術は作戦次元以外の次元でも使用されるという説明がドクトリン上にある。ただし、本稿では作戦次元における作戦術を中心に記述している。

⁴ 米陸軍ドクトリンでは次のように説明されている。交戦 (engagements) は比較的低い階層の部隊が行う戦闘 (combat) であり、目安としては旅団以下の規模で行われる。会戦 (battles) は交戦より規模が大きく、複数の交戦からなっている。なお、戦闘とは「対立する目的を有し、ともに思考し、適応力がある指揮官らの間で行われる、対立的意思と暴力的な戦いに関する致死的な衝突 (lethal clash)」である。

(表1 続き)

米陸軍の作戦術	区 分	米陸軍の戦術	
<ul style="list-style-type: none"> • 作戦の大綱 • 戦術的タスク 	アウトプット	戦術の術と学	TTP の組み合わせ
		戦 術	戦闘力の発揮 (戦場での勝敗)

(1) 定義

作戦術の定義は、「目的、方法、手段を統合することで、軍事力を組織し運用するための戦略、戦役、作戦を進展させるよう、指揮官と幕僚が自らの技能、知識、経験、創造性、そして判断力に支えられて行う認知的な取り組み (cognitive approach)」である。“cognitive”は「何かを知り、理解し、学ぶ過程に関連する」を意味する形容詞であり、“approach”には“method” (方法) という意味もある⁵。

なお、米陸軍における「作戦 (operation)」の定義は、「軍事活動、または、戦略的、作戦的、戦術的、軍種・兵科的 (service)、訓練上または管理上の軍事的任務を実行すること」とされている。「作戦次元」と「作戦術」と「作戦」の三者を比較すると、作戦術は「作戦実施に必要な術」というより「作戦次元に必要な術」という意味合いが強いという印象を受ける。

次に、米陸軍における戦術 (tactics) の定義は、「相互関係を有する部隊の運用 (employment)、適切な配置⁶ (ordered arrangement) 及び指示された活動 (directed actions)」である。「相互関係を有する部隊」とあるのは、二つ以上の部隊があって初めて戦術が成立することを表していると考えられる。また、この定義から、米陸軍では戦闘に直接関係しない行動も戦術に含まれることがわかる。

ここで、米陸軍ドクトリンの“tactics”と日本語の「戦術」との差異について補足する。“tactics”の日本語訳には一般的に「戦術」が当てられている。日本語の「戦術」の意味は、一例として「作戦および戦闘において、状況に即し任務達成に最も有利なように部隊の配置、移動および戦闘力の行使をする術⁷」や「戦闘実行上の方策⁸」とされているように、基本的には「術」や「方策」である。しかし、先述のとおり現在の米陸軍の“tactics”は「運用、配置、活動」そのものであり、運用などのための「術」や「方策」とはややニュアンスが異なる⁹。日本語の「戦術」に該当するのは後述する「戦術の術 (art of tactics)」と「戦術の学 (science of tactics)」のいずれか、またはその両方にまたがる事項である。本稿で「戦術」という場合、基本的には米陸軍ドクトリンの“tactics”のことを指している。

(2) 作戦術と戦術の関係

まず、米陸軍の戦略的な役割¹⁰と戦術との基本的な関係を述べる。

米陸軍の戦略的な役割は、いわゆる紛争前の抑止段階から紛争中の大規模陸上戦闘の実施段階、そして、紛争終結前後に勝利の成果を政府などに引き継ぐ段階までドクトリン上に示されている。これらの役割は、決定的行動 (decisive action) を通じて遂行される。決定的行動とは戦術に分類される行動であり、その中でも特に中心的な行動¹¹である。決定的行動には攻撃 (offense)、防御 (defense)、安定化

⁵ 『ロングマン現代英英辞典』 (4訂新版) (桐原書店、2003年)。

⁶ 原文を読むと、“arrangement”は「編成」や「配列」とも意味が取れるように見えるが、*The Oxford English Dictionary 2nd ed*, New York: Oxford University Press, 1989によれば“disposition”の意味が記載されているので「配置」と訳した。

⁷ 防衛大学校防衛学研究会『軍事学入門』第2版 (かや書房、2012年) 141頁。

⁸ 『広辞苑』 (第六版) (岩波書店、2008年)。

⁹ 過去のドクトリン、例えば1993年版 *FM100-5 Operations* における“tactics”の定義は「会戦と交戦に勝つために利用できる手段を運用する術と学 (art and science)」となっており、日本語の「戦術」に近い定義であった。

¹⁰ 一般的な役割 (role) であって、特定の任務 (mission) のことではない。

¹¹ 米陸軍の戦術には決定的行動を頂点として、決定的行動を支える偵察、警戒、部隊移動など (enabling operations) や、より下位の伏撃や制圧など (tactical mission tasks)、あるいは機動の方式 (forms of maneuver) や防御の方式 (forms of the defense) が含まれる。

(stability)、市民当局の防衛支援 (defense support of civil authorities) の四つがあり、これらを継続的かつ同時並行的に行うことで戦略目的が達成される。

こうした戦略と戦術をつなぐ作戦術には二つの主要な機能がある。一つは戦術行動を含む各種の軍事活動を戦略に対して整合させ、戦術を直接支援できるようにすること、もう一つは戦術行動を可能な限り最も有利な状態で行えるようにすることである。作戦術を通じて指揮官は、戦略目標の追求に対して最も適切な形になるように、戦術行動を時間、空間、目標の枠組みの中に配置する。

つまり、作戦術は、いつ、どこで、何のために (基本的に複数の) 戦術行動を行うかを決定し、かつ、その戦術行動を有利な状態で行えるよう準備するものであり、戦術は作戦術によって配列された戦術行動の実行である。

(3) 問題解決に関する差異

作戦術と戦術は、ともにそれぞれの次元の問題解決手段という一面をもつ。本節では問題解決に焦点を当て、両者の差異を把握する。なお、先に述べたとおり、米陸軍の戦術には戦闘に直接関係しない行動も含まれるが、本節で扱うのは戦闘中心の問題解決である。

ア 問題解決に必要な能力

作戦術に関係する能力・技能などを示す語をドクトリン上から抜き出してみると、技術 (skill)、幅広い経験、多領域 (multiple domains) にまたがる軍事的能力・戦術・戦技の知識、判断力、批判的思考、創造的思考などが挙げられる。また、作戦術は原語で “operational art” であるように、基本的には「術」であるが、作戦術を上手に適用するためには「作戦の学 (science of operations)」も重要であることが述べられている。作戦の学の定義は明示されていないが、例として部隊の移動時間や利用可能な補給品量などが挙げられており、データから直接的に算出可能な事項や、そのような見積り行為自体を指すものと考えられる。

一方、戦術的な問題解決に関しては戦術の術と学 (the art and science of tactics) が必要であると述べられている。戦術の術は三つの項目からなっている。一つ目は任務達成のための手段を創造的かつ柔軟に使用すること、二つ目は自らも考え、状況に適応してくる敵に対して、不確実な状況の中で意思決定をすること、三つ目は戦闘が兵士に与える影響を理解することである。戦闘が兵士に与える影響の理解とは、実戦と訓練の違いを理解することであり、実戦で暴力、死、偶然がもたらす摩擦を理解することでもある。戦術の学とは戦術の計測と文書化が可能な側面を理解することと説明されている。例としては彼我の編成のように数値で把握可能な事項や特定の作業手順のような書面的知識が挙げられている。

両者を比較すると、創造性やある程度の知識が必要とされるのは共通している。その一方で、戦術の術と学では不確実性や摩擦が強調されるなど、現場での対処能力に重点が置かれているように見える。

イ 問題の把握

作戦次元でも戦術次元でも、ともに望ましい状態と現状を比較することで問題が把握される。比較における尺度となるものは作戦的変数 (operational variables) と任務変数 (mission variables) である。

まず、作戦的変数とは政治 (political)、軍事 (military)、経済 (economic)、社会 (social)、情報資料 (information)、施設 (infrastructure)、物理的環境 (physical environment)、時間 (time) のことであり、各頭文字をとって “PMESII-PT” とも表現される。作戦的変数は特定の任務が付与される前から、指揮官などが自らの置かれた環境を包括的に把握するために用いられる。

続いて、任務変数とは任務 (mission)、敵 (enemy)、地形と天候 (terrain and weather)、利用できる部隊と支援 (troops and support available)、利用できる時間 (time available)、民間への考慮 (civil considerations) のことであり、同じく頭文字をとって “METT - TC” とも表現される。任務変数は指揮官などが特定の任務を付与された後に使用するものであり、任務遂行に影響を与える事項を把握するた

めに用いられる。なお、「任務変数」の説明に「任務」が使用されているが、任務の「内容」を明らかにするために、任務の「文面」やその背景となる上級部隊の企図などを分析するという関係にある。

管見の限り、作戦術に関しては作戦的変数と任務変数のどちらに重点があるかドクトリン上に確認できないのに対して、戦術的な問題は任務変数で把握されることが明記されている。

ウ アウトプット

(ア) 作戦術

まず、作戦術のアウトプットについて述べる。任務を与えられた指揮官は、まず作戦的アプローチ (operational approach) を考察する。作戦的アプローチとは与えられた任務を達成するためにどのような行動を行う必要があるかという大まかな説明 (description) である。ただし、作戦的アプローチの段階では現実的な考慮がまだ十分に行われていないため、そのままでは詳細な計画に具体化することができない。指揮官は作戦術を通じて作戦的アプローチを作戦の大綱 (concept of operations) に変換し、最終的には実行すべき戦術的タスク (tactical tasks) に変換する。つまり、作戦術のアウトプットは作戦の大綱または戦術的タスクである。

作戦的アプローチも作戦の大綱も任務達成のための方法を表すが、作戦の大綱は、作戦的アプローチに対して様々な検討を加えることで導き出されるものであり、作戦的アプローチよりも具体性や実行の可能性などが向上したものである。

この検討を補助する知的道具として、作戦術の要素 (elements of operational art) が使用される。作戦術の要素には、目標態勢・状態 (end state and conditions)、重心 (center of gravity)、決勝点 (decisive points)、作戦線と努力線 (lines of operations and line of effort)、テンポ (tempo)、作戦段階区分と移行 (phasing and transitions)、作戦限界 (culmination)、作戦範囲 (operational reach)、作戦拠点の確保 (basing)、リスク (risk) がある。作戦術の要素を使用することにより、以下の三つの事項が容易になる。その一つ目は指揮官の企図や戦闘力の使用方法に対する理解や説明、二つ目は決定的行動の最も効果的かつ効率的な使用方法の決定、三つ目はリスクを踏まえた上での目的、方法、手段の統一である。戦略次元で目的、方法、手段、リスクの範囲が定められることは既に述べたとおりだが、作戦術ではこれらを状況に応じて適切な形で組み合わせることになる。

こうして、作戦術を通して得られた作戦の大綱や戦術的タスクは、戦略目的や上級部隊指揮官の目的に直接的または間接的に必ず寄与し、少なくとも見積り上は実行可能かつ可能な限り有利な条件のものであり、リスクを孕む行動であっても、それは受容可能な範囲のものとなる。

(イ) 戦術

続いて、戦術のアウトプットについて述べる。戦術的な問題は戦術 (tactics)、戦技 (techniques)、手順 (procedures) (以下、三者をまとめて呼称する場合、「TTP」という。) の組み合わせと、戦闘力 (combat power) の使用によって解決される。

戦術的な問題を戦術で解決するというと、同語反復のような印象を受けるが、戦術次元の問題 (戦闘や戦術的タスク実行上の問題) を戦術 (部隊の運用、配置、行動) などで解決するという意味だと筆者は考える。戦技とは「任務、機能またはタスクを実行するために使用される非規範的な方法 (ways) や手段 (methods)」と定義されており、戦術よりも具体的なものと説明されている。例として部隊が前進する際、一部の部隊が敵方向を監視する行動が挙げられている。手順とは「特定のタスクをどのように実行するかという標準的かつ詳細な手段 (steps)」と定義されており、例として医療後送を要求する際の連絡手順が挙げられている。TTP を状況に適應するように組み合わせることが、戦術的な問題の解決に必要とされている。

戦闘力とは「与えられた時間内で軍事部隊や編隊が利用できる破壊的、建設的、そして情報の能力の

総合的な手段（means）」と定義されており、八つの要素（リーダーシップ、情報資料、指揮・統制、移動・機動、情報¹²、火力、維持、防護）から成るとされている。戦闘力の発揮、ひいては勝利のためには指揮官の主導性の発揮や維持が重要であることがドクトリンで述べられている。最終的には指揮官の計画に関する総力の結集と、部下の各リーダー達の実行能力によって戦術的な問題が解決される。

管見の限り、TTP の組み合わせと戦闘力の使用との関係は、ドクトリン上に明記されていない。筆者は前後の説明から、戦術の術と学により TTP は適切な形で組み合わせられ、戦闘力へ変換されるものと解釈する。よって、術と学に支えられた戦術のアウトプットは戦闘力の発揮であり、戦場での勝敗でもありと考える。

（4）考察

ここまで比較してきたとおり、米陸軍の作戦術と戦術は相互に関連しつつも、問題の捉え方も考察する事項もアウトプットも異なっている。このことから以下の二つのことがいえる。

第一に、米陸軍の作戦術と戦術は、相互に関連する別の問題に対する別の取り組みであるということである。本稿の範囲でいうならば、作戦術が扱う問題とは「戦略目標に対してどのような戦術行動を行うか」であり、戦術が扱う問題とは「その戦術行動をどう行うか」である。机上では、両者が別の問題であるのは明瞭である。しかし、実際の戦争では戦略目標に対して真に勝つべき戦闘と、戦術的に勝てそうな目の前の戦闘を混同して、資源の配分を誤るようなこともあるのではないか。作戦術の導入は、このような錯誤を防止する機能を得ることにつながる。

第二に、米陸軍は「戦略目標に対してどのような戦術行動を行うか」と「その戦術行動をどう行うか」を、それぞれ別の解き方を要する問題だと捉えているということである。一見違う問題であっても、解き方が共通するものは存在する。逆に、解き方や視点を変えることで異なる答えが導かれる問題も存在する。これまで述べたとおり、作戦術と戦術は別の取り組みである。もし、これら二つの問題の解き方が同じでよいとするならば、作戦術と戦術の両方を保持する必要性は下がる。そして、そもそも作戦術を導入しないか、導入しても研究や習熟のためのコストなどの都合からいずれかが淘汰されたり、一つに統合されたりしただろう。作戦術を導入する組織と導入しない組織の違いは、これら二つの問題に対する解釈の違いにあるのではないだろうか。

おわりに

本稿では米陸軍の作戦術と戦術を比較して、両者の関係や差異を明らかにした。そして、本稿から次の仮説が導かれる。それは、「作戦術を有しない組織では、『戦略目標に対してどのような戦術行動を行うか』という問題を、『戦術行動をどう行うか』という問題と同じ解き方で扱っている」というものである。

この仮説について、陸上自衛隊ではどうなのか。筆者個人の経験から言えば、陸上自衛隊の戦術教育では「戦術行動をどう行うか」の一環として、「上級部隊の『戦術目標』に対してどのような戦術行動を行うか」は扱われているが、「『戦略目標』に対してどのような戦術行動を行うか」は扱われていない。しかし、陸上自衛隊内に共有されている正統な問題解決方法は、戦術以外にはあまり聞かない。よって、陸上自衛官が「戦略目標に対してどのような戦術行動を行うか」を扱う必要に迫られた場合、まず「戦術行動をどう行うか」の解き方を準用すると予想される。そして、もしこの解き方で満足できる答えが得られなければ、この問題を担当する個人や部署の技能に依存して解決することになるだろう。

この仮説についての考察は、今後の課題としたい。

¹² 情報（intelligence）は、その元となる情報資料（information）を収集、加工、集約、評価、分析し、解釈して得られたもの。

主要参考文献

Headquarters, Department of the Army, *ADP 1 THE ARMY* (2019).

Headquarters, Department of the Army, *ADP 1-01 DOCTRINE PRIMER* (2019).

Headquarters, Department of the Army, *ADP 3-0 OPERATIONS* (2019).

Headquarters, Department of the Army, *ADP 3-90 OFFENSE AND DEFENSE* (2019).

Headquarters, Department of the Army, *ADP 5-0 THE OPERATIONS PROCESS* (2019).

Headquarters, Department of the Army, *ATP 5-0.1 ARMY DESIGN METHODOLOGY* (2015).

本稿の見解は、防衛研究所を代表するものではありません。無断転載・引用はお断り致しております。
ブリーフィング・メモに関するご意見・ご質問等は、防衛研究所企画部企画調整課までお寄せ下さい。

ご連絡先 : plc-ws1@nids.go.jp (@を@に変更の上、ご送信ください。)

防衛研究所ウェブサイト : <http://www.nids.mod.go.jp/>